

# 日照りの夏

東谷を歩く

今年の夏は、全国的に記録的な猛暑でした。過去にこのような夏がなかったのか調べてみると、『千葉県の歴史通史編 近現代2』に次のように記載がありました。

1933(昭和8)年は大干ばつで、県下で大きな被害を受けたのは九十九里一帯の農村でした。5月から8月の八日市場町管内の降水量は平年の49パーセントにすぎず、

沼や溜め池から用水をくみ上げたり井戸を掘るなど、不眠不休で対応しましたが、この大干ばつで収穫高は平年の20パーセント以下の悲惨な結果でした。

1925(大正14)年にも匠瑳郡内の耕地の5割以上が被害を受ける干害に襲われました。

最近、東谷区の人から資料の提供がありました。古文書の内容は、幕末から明治維新にかけてのもので、東谷村の官有地として、村内に神社や寺院境内地のほか、「溜井九町一反一畝十九歩」の記載がありました。1884(明治17)年の地図を見ると、平和地区上谷中・新宿から南下する道路(旧県道104号線)の両側に小さな沼が点在していることがわかります。これらが用水の溜め池として使われ、その総面積は90ヘクタール余りあり用排水路が整備されるに従い埋められ水田となったのでしょうか。

大正14年に干害に対する大利根用水事業を計画したのが、千葉県技師・野口初太郎でした。国、県、市町村もこの計画に素早く対応し、4年後には期成同盟創立大会が開かれました。しかし、数年は豊作が続いたこともあり、期成同盟の活動はしばらく休止状態でした。ところが昭和8年の干ばつがあり、県に対し県営による即時工事の着工を請願し、許可がおりました。その頃からこの事業に対する反対運動が広がりを見せたものの、同15年に第一期大幹線工事 completed しました。大正・昭和の大干ばつが大利根用水事業に大きな影響を与えました。

道路沿いに平成元年に立てられた圃場整備事業の竣工記念碑があります。碑文に昭和40年以前の状況が「生産の基本となる用水、排水の施設は無くかんがいは田越という状態で」と書かれています。平和地区の圃場整備事業は昭和43年から6か年かけ完成し、「昔を知る者にとっては感慨を新にするものである」とも刻まれています。

(元)市職員・依知川雅一

問 秘書課広報広聴班

☎ 73・0080



平和工区の竣工記念碑